

聖書: エステル記4章1～11節

説教: 断食と泣き声と嘆き

はじめに

いまからおよそ二千五百年前、ペルシャ帝国のクセルクセス王は新しい王妃を迎えるために、国中から若い女性を集めてコンテストをしたところ、最後に選ばれたのが、モルデカイが親戚から引き取って育てていたエステルでした。それまで町の片隅で普通に暮らしていた女性が、一夜にしていきなり皇室に迎えられて王妃になったわけですから、すばらしいシンデレラ物語と言えそうです。ところが、このことで一番戸惑ったのはモルデカイとエステルでした。彼らは故国を失って異国の地で生きるユダヤ人でありながら、神を信じ、聖書のみことばに従ってきました。その聖書には異国人と結婚してはならないと書いてあって、王妃となるということは律法に背くことになる。しかし王の命令は絶対ですから、断ることはできません。エステルは王妃としてスサの城に迎えられます。

どうしてこういうことが起きるのか。モルデカイは考えたはずです。

すべては偶然ではない。神のご計画があるに違いない。それが何であるかわからないまま五年の月日が経ったときに事件が起きます。クセルクセス王の側近であるハマンが、ユダヤ人を皆殺しにして、家財道具いっさいをかすめ奪えという法令を国中に出したのです。このときモルデカイとエステルはどうしたのか。ここにどのような神のみわざが示されているのか。ともに考えてまいります。

1 モルデカイ

1) 断食と泣き声と嘆きが起こった

1節から3節を読みます。「モルデカイは、なされたすべてのことを知った。モルデカイは衣を引き裂き、粗布をまとい、灰をかぶり、大声で激しくわめき叫びながら都の真ん中に出て行った。そして王の門の前のところまで来た。王の門の中には、粗布をまとったままでは入ることができなかったのである。王の命令とその法令が届いたどの州においても、ユダヤ人の中には大きな悲しみがあり、断食と泣き声と嘆きが起こり、多くの人たちは粗布をまとって灰の上に座った。」

ユダヤ人はみな悲しんで「粗布をまとって灰の上に座った」とあるところは、もう少し正確には、「悲しみのあまり灰の上に座り込んでしまった。」こう言い直した方がよい。モルデカイも同

じような姿となり、王の門の前のところに行くのです。

エステルが侍女たちと宦官たちから、モルデカイのことを聞かされときの様子について、「王妃は非常に痛み苦しんだ」とあります。これもわかりやすくすれば、「王妃は激しく身をよじるようにして苦しんだ。」ということです。宮廷のしきたりによって、エステルはモルデカイと直接会うことはできません。それでエステルは、人を介してモルデカイに新しい衣服を届けようとしても、モルデカイは着ようとしません。それでエステルは、これはどうしたことなのか、詳しい事情を知りたくて宦官であるハタクをモルデカイのところへ送ります

2) ハマンの計画は確実に行われる

そのときモルデカイはこのように告げます。7、8節。「モルデカイは自分の身に起こったことをすべて彼に告げ、ハマンがユダヤ人を滅ぼすために王の宝物庫に納めると約束した、正確な金額も告げた。また、ユダヤ人を根絶やしにするためにスサで発布された法令の文書の写しを彼に渡した。それは、エステルに見せて事情を知らせ、そして彼女が王のところに行って、自分の民族のために王からのあわれみを乞い求めるように、彼女に命じるためであった。」

ポイントが二つあります。一つ目。「王の宝物庫に収めると約束した、正確な金額を告げた。」前回のところ触れました。ハマンは、ユダヤ人虐殺計画の許可を王からもらおうとして、自分の財布から銀一万タラントを国の金庫に納めると提案します。それで王は、「そこまで言うのなら、そのお金はハマンが取ってよいので、計画を進めなさい」というようなやりとりがあった。これは密談ですから、ハマンと王の二人だけしか知らないはずですが、ところがモルデカイは城の中の最高機密情報入手することができる立場にあったようです。つかんだ情報を分析した結果、この計画はことばだけの脅しではない、ハマンは実際にこれをしようとしているとの確証を得た。なのでエステル、あなたはこれを真剣に聞かなければならない。そう言っている。

3) 自分の身に起こったこと

そして二つ目のポイント。「モルデカイは自分の身に起こったことをすべて彼に告げた」とありま

す。さきほど1節から3節を見ました。よく注意してください。1節で、モルデカイが荒布をまとい、灰をかぶったとあって、3節でもユダヤ人が大勢粗布をまとって灰の上に座った。そういう順番で書いてある。そのことを踏まえると、モルデカイが「自分の身に起きたこと」と言っているのは、どういう意味か。「自分の身」だからモルデカイ一人ということではない。「自分の身」とは、同胞のユダヤ人すべてを指して言っている。彼らの悲しみと嘆きを背負いながら、モルデカイは彼らを代表して、エステルのところに出向いてきたのだと言っているのです。

2 エステル

1) 自分の民族のために

エステルは、これを聞いて初めて大変なことが起きたことを知ります。いったいどうしたらよいのか。モルデカイは、エステルに二つの重要なポイントを伝えてきた。

一つ目。8節後半の「自分の民族のために」ということば。訳し直せば「エステル、お前が属する民族のために」です。パスポートには「国籍」という欄があり、日本人であればJAPANと印刷されていて、どこに行くにも何をするにも国籍はついて回ります。エステルの時代はそうではなかったようです。エステルは自分がユダヤ人であることを人に言わないようにとモルデカイから言われていたのですが、王妃コンテストの候補者選びの書類審査でも国籍、民族は問われなかった。それで審査にパスし、宮廷に入っても何の不自由もなかった。ところが、ここにきてモルデカイはエステルに、自分の属する民族のことをはっきり自覚しなさいと迫ってきた。このことは、また次回のところで詳しく触れます。

2) 王からのあわれみを乞い求めるように

モルデカイが語った二つ目のポイント。同じく8節後半。「そして彼女が王のところに行って、自分の民族のために王からのあわれみを乞い求めるように、彼女に命じるためであった。」

エステルが王妃に選ばれたのは、何かの神のご計画であったとしても、それがどのようなことなのかかわからないまま、五年が過ぎていきました。ところが、ハマンがユダヤ人虐殺計画の法令を出したときにモルデカイは気がつきます。エステルが王妃に選ばれたのはもしかしてこのときのためだったのではないか。自分の民族を救うために王からのあわれみを乞い求める、そのためにエステルは

王妃となったのではないか。そのような結論に至った。

すぐに出せた結論ではありません。他の方法がないかといろいろ捜した。しかし宮廷内のあらゆる情報を総合すると、脱出の道はすべて塞がれてしまっている。唯一残った道はエステルが王に願い出ることしかない。王妃なのだからそれは簡単なことだった、と思っはなりません。

3) 死刑に処せられるかもしれない

なぜか。11節前半。「王の家臣たちも王の諸州の民も、だれでも知っているように、召されないのに奥の中庭に入って王のところに行く者は、男でも女でも死刑に処せられるという法令があります。」

この三十日間、王から召されていないということは、おそらく王は今エステルに会う気がない。それなのに、無理矢理王のところに行こうものなら、殺される可能性があります。これがエステルの正直な答えでした。

モルデカイはこのことを知らなかったのか。いいえ誰でも知っていたことです。知っていながら、「それでもあなたは、自分の民族を救うために王からのあわれみを乞い求めなければならない。それがあなたの役割なのだ」と言わなければならないかった。

モルデカイは、エステルをなくなった叔父夫婦引き取り、小さな時からまるで自分の娘のように育ててきました。そのエステルに対して、「あなたはユダヤ人を救うために死ななければならない」と言うのです。ふつう言えますか、そんなこと。そんなこと本当は言えない。けれども、エステルは王妃として召されたのは、このときのために、神があらかじめ備えてくださったことだったのだと考えると、こう言うしかなかったのです。

もしもモルデカイが信仰者でなかったのなら、こんなに悩むことはなかったでしょう。「ユダヤ人は大変なことになったけれど、エステル、あなたは王妃として宮廷で幸せに暮らしなさい。」それで終わり。モルデカイが信仰者であったがゆえに、エステルを差し出さなければならない、そんな苦しみの道を通ることになりました。

1節でモルデカイが衣を引き裂き、粗布をまとい、灰をかぶらなければならない理由。もちろん同胞ユダヤ人のこともありましたが、エステルに死ぬ覚悟をするようにと言わなければならないかった。その悲しみもあったのです。

3 神

1) 人はなぜ苦しむのか

この先どうなっていくのか。最後まで読んだ方は、結末を知っているでしょう。エステルは殺されず、ユダヤ人は救われていく。ですから、モルデカイは正しい判断をしたことになる。ではすべての問題は解決したのか。そうではない。ハマンの悪賢い計画は、このときは阻止されました。けれどもユダヤ人への迫害はそれで終わったわけではない。迫害は歴史のなかで何度も繰り返されていく。ナチスのホロコーストも有名ですが、例えば五百年前、スペインの王はユダヤ人追放命令を出したので、大勢のユダヤ人が難民となってヨーロッパや北アフリカの各地に逃れなければならなくなり、途中で行き倒れになる者がたくさんいたと言われます。神はなぜこのようなことを許されるのか。私たちはもちろんですが、ユダヤ人たち自身が切実に問いかけてきた疑問です。

2) 神はどのように救うのか

納得できる答えはだれももっていません。しかしはっきりと分かることが一つある。神は私たちに無関心ではない。神は罪という悪から救おうとされている。どのようにしてでしょうか。まるでスーパーマンのようなヒーローが現れ救ってくれるのか。いいえ。モルデカイとエステルを見てください。彼らがまるでユダヤ人を代表するようにして、王からのあわれみを乞わなければなりません。もしかして殺されるかも知れません。それでも前に進んでいく。なぜですか。大きな悲しみによって、断食と泣き声と嘆きが起こり、粗布をまとって灰の上に座ったユダヤ人たちをご覧になり、まるで身もだえするようにして神がそれを悲しんでくださったから。神は黙ってられないのです。それで、イエスが天から降りて来てくださって、十字架の出来事が起きていった。救いの方法はまったく変わらない。私たちにはこの救いが備えられています。